慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『白鯨』の一解釈
Sub Title	Another reading of Moby Dick
Author	山本, 晶(Yamamoto, Sho)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.185- 199
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0185

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『白鯨』の一解釈

Ego non baptizo te in nomine patris,
sed in nomine diaboli!

山　本　　晶

I

ハーマン・メルヴィル（1819—1891）の『白鯨』（1851）に関しては，これまでも，さまざまな解釈が行なわれてきた。いささか誇張的に，読者の数ほど解釈もある，と言う者もあるくらいだ。たとえば，あの決定版的な『メルヴィル伝』の著者，レオン・ハワードなどは，1964年，〈ヴォイス・オヴ・アメリカ〉の放送を通じて行なった『白鯨』に関する講演で，つぎのように言っている。

> 『白鯨』のような作品は一体何を意味するのかというのは，読者の頭に頻繁におこってくる問題であり，文芸批評家が熱心に幾多の方法で答える問題である。この作品の寓話は，寓意的象徴的に，実に頻繁に実に多くのやり方で解釈されているので，『白鯨』は，人生の葛藤に深く巻きこまれ，芸術作品に表われている闘争精神に関心を寄せるような，感じやすい読者とほぼ同じくらい多くの〈意味〉を含んでいるといえる。

もとより，これは一種の強調的なレトリックであって，文字通りに受けとる必要はないであろう。だが，読者が，それぞれの背景を持ちながら，それぞれの状況にあって，この作品をさまざまに読んでいることは確かであろうし，従って，この作品への接し方もそれだけ数多くあるのだという意味において，レオン・ハワードの言はやはり正しいと言わなければなるまい。

ただ，どの作品にしても，読者は各自，興味ある角度から作品に接しが

ちであるから，『白鯨』のように複雑な作品は，また，それぞれの解釈をいずれかに片寄ったものにする危険がある。この点は，たとえば，ルーサー・マンスフィールドと共に『白鯨』の決定版とも呼ぶべきものを校訂した，あのハワード・ヴィンセントが，その著『白鯨の精製』(1949) において指摘しているところである。

> [『白鯨』は] 実に複雑であるから，多くの人びとにさまざまに受けとられている。(中略) これらの解釈は，すべてこの作品にあてはまるけれども，しかし，そのうちどれか一つのみをもって他を排除することはできない。なぜなら，いずれか一部分を強調しようとすれば，他のすべての部分を逸してしまうことになるからである。それが部分的解釈のおちいる危険というものだ。

まことに，あの伝説の海獣リヴァイアサンにも似て巨大な作品を完全に解剖しつくすことは，われわれがたまたま持ちあわせているような，この小さなメスを以てしては，とうてい至難のわざといわねばならぬ。

だが一体，『白鯨』には解釈すべき意味が秘められているのか，どうか。なるほど，中には，これを単なる捕鯨物語と看做し，それ以上でもそれ以下でもない，という者もある。しかしながら，われわれは，この作品に隠されていると思われるものを，なんとかして探りあててみたいという誘惑をはらいのけることができない。現に，この作品自体の中に——第79章だが——われわれの解釈力に挑戦しているとしか思われない，つぎのような言辞が見えているではないか。

> [19世紀フランスの考古学者] シャムポリオンは，御影石の表面のシワのような象形文字を解読した。だが，あらゆる人物，およびあらゆる生物の顔にあるエジプト語を解読するシャムポリオンはおらぬ。人相学も，他のあらゆる人間の科学と同様に，一時の寓話にすぎぬものである。30か国語に通じていた [イギリスの東洋学者] ウイリアム・ジョーンズ卿にして，単純きわまる農夫の顔に，深遠微妙な意味を読みとれなかったというのだから，われイシュミールごとき無学の徒が，抹香鯨の額のおそるべきカルデア文字を読みとろうなど

とは，大それた話だ。わたしはその額を諸君の前におく。読みとれるものなら，読んでみたまえ。

解釈できるなら解釈してみよ，というのだ。これが読者に対する挑戦でなくして何であろう。

この，『白鯨』には解釈すべき意味がある，ということは，ヘンリー・A・マレーが別の方面からも推断している。それは1951年，『白鯨』出版の百周年を記念し，ウイリアムズ大学で行なった講演でのことである。

メルヴィルがホーソーンにあてた有名な手紙に，決定的とも思われる一文がある。それは，「あなたがこの作品を理解してくださいましたので，ただいま，わたしは言い知れぬ安堵の気持にひたっております」というものである。してみれば，『白鯨』には理解すべき意味が確かにある，ということを断定できるわけだ。また，ホーソーンが何も言い残しておかなかった以上，現代の批評家がその意味を見いだして，それをはっきり印刷して記録するならば，地下のメルヴィルの霊も永却に鎮まることであろう。この場合，さきに引用したメルヴィルの手紙の中で，そのすぐあとのところに決定的な一文――「わたしは，これで一冊，よこしまな書物を書きおえました」とあることを想起すればよいであろう。これでどういうことになるかは，はっきりしている。すなわち，今日まで行なわれてきた解釈で，『白鯨』は何らかの意味でよこしまだということを立証できなかったような説は，いずれもみな，作者が公然と作意があったと認めた事実を看過してしまったことになるのである。

ここで，ホーソーンが『白鯨』という作品を〈理解〉したからとて，ただちにこの作品に何らかの意味をうかがうのは，いささか速断のきらいもあるが，メルヴィル自身がこの作品を〈よこしまな書物〉と規定した点は，マレーの指摘をまつまでもなく，注目されるところである。何がゆえに，それは〈よこしま〉なのであるか。ほかでもない，作品自体の中に見いだされる内的証拠によって，『白鯨』に秘められた意味を解き明かすことができれば，その点もおのずから明らかになるであろう。

II

では，『白鯨』のテキストの中に，巨鯨モービー・ディックに関する描写をもとめ，それが何を表わしているかを考えてゆこう。

まず注目すべきは，第41章に見られる，つぎのような部分である。

> 眼前に遊戯するモービー・ディックは，おのれの内部に巣喰って，ついには心臓も肺臓もその半ばを喰いつくしてしまうところの，ある邪悪な魔の執念が凝って形に現われたもののように思われた。

この描写によって示されていることは，三つある。すなわち，第1に，モービー・ディックは，なにか無形のものが具体的に形をとって現われたものであること，第2に，その無形のものは，人間の内部に存在するものであること，第3に，それは悪魔的な性質をもっていること——この三つである。さらに，この部分のあとには，つぎのようにもいっている。

> 心を乱し苦しめるもの，いとわしき事態をかきおこすもの，邪悪を体とする真実，筋骨を砕き脳髄を圧しつぶすもの，生命と思想にまつわるあらゆる陰険な悪魔性——これら一切の悪は，心狂ったエイハブにとって，モービー・ディックという明らかな肉体をもってあらわれ，これに向かって攻撃することも可能と思われたのである。

このような悪魔的なものの化身が魂の奥深くに壮大な姿をあらわしてきたと，『白鯨』の第1章において，イシュミールは述べている。

われわれは，このモービー・ディックを，19世紀のアメリカに大きくその姿をあらわし始めた新しい知識，旧思想から見れば〈邪悪な〉知識，旧思想を懐疑し否定しようという破壊的な知識，これを換言すれば，メルヴィルを神の懐疑におとしいれ，ややもすれば神の否定にまで心を向かわせようとした，現代の自己中心的な思想の象徴，と見たいと思う。

やはり第41章には，

> そもそも，この世界のはじまりから存在し，今日，キリスト教徒でさえ，世界の半分をその支配にまかせ，太古の東方の拝蛇教徒たちは，それを魔神の像にしたてて拝んだ，このとらえ難い悪意

とも表現している。ここに出てくる拝蛇教徒というのは，倒錯した道徳観で悪名高いグノーシス教徒のことである。この一派は，旧約聖書にあらわれる悪徳漢たちは実際には英雄であったと称し，カインや，ソドムの徒や，淫逸をもって鳴ったエジプト人たちを崇拝した者たちなのだ。拝蛇教徒——英語でオーファイトというのは，語源的にはギリシャ語であって，やはり〈蛇の信者〉という意味である。かれらがことのほか崇拝したのは，その名の示す通り，蛇であった。そして，この蛇は，いうまでもなく，あの楽園において，禁断の木の実に象徴される〈知識〉ないしは〈智恵〉を，人類の始祖に与えたとされている生物ではなかったか。また，グノーシスとは，これも語源的にはギリシャ語で，〈知識〉または〈智恵〉の意味なのである。

こう見てくると，「この世のはじまりから存在したもの」とか，「今日，キリスト教徒でさえ，世界の半分をその支配にまかせ」ているものとか，拝蛇教徒たちが「魔神の像にしたてて拝んだ，このとらえ難い悪意」とかいうものは，すべて，神——この場合，キリスト教の神——への懐疑や，神からの離反を生みだす〈知識〉のことではないのか。そして，今かりに，表現を簡略にするために，この知識を，その一つの大きな属性であるところの〈懐疑〉とイコール符号で結んでみれば，『白鯨』の描写の中には，モービー・ディックが〈懐疑〉の象徴として描かれていると思われるところや，その他それとの関連において解釈できるところが，何個所も見られるのである。

たとえば，さきに引用した第41章の部分のほかにも，「鯨の白きこと」と題する第2章において，

> 白色とは，本質的にいって，色というよりも，眼に見える色がない状態であり，しかもあらゆる色を凝結したものであるが，それだからこそ，荒涼たる雪景色には，意味深長な無言の空白——つまり，無色にして全色の無神論の脅迫感があるのであろうか。

といっているところなどは，まさに神への懐疑，またはその否定そのものである。また第79章では，

もし今後，どこかの非常に文化の進んだ詩的な国民が，昔の楽しい五月祭の神々を呼びもどして相続権をあたえ，今日の自己中心的な空に，今日の神々の出没することなき丘に，ふたたび生きて鎮座ましますようにはからうようなことがあれば，抹香鯨こそ，ジョーヴの高御座（タカミクラ）について，主神となること，ゆめ疑うべからずだ。

と言っている。ここにおいて，「今後，どこかの非常に文化の進んだ詩的な国民」というのはアメリカ人のことであり，「今日の自己中心的な空」とか，「今日の神々の出没することなき丘」とかいうのは，神を失った人間中心の世界のことであり，そこににおいて抹香鯨が最高神の玉座に位置を占めるであろうというのは，懐疑を生みだすような自己中心的な知識がやがて支配するであろう，ということの予言と見られるのである。

やはり第41章において，エイハブは，

癒しがたいある想念の牙にグサリと身動きもならず突き刺されて，身のうちは掻きむしられ，外はただれた人間

と呼ばれ，かれこそ，

あらゆる動物のうちで，もっとももものすごい奴らにモリを投げ槍をふるうにうってつけの人間

といわれている。エイハブはモービー・ディックと闘って片脚を喰いちぎられたのであった。その結果，

狂人さながらになったエイハブは，その肉体にうけた惨害ばかりか，おのれのあらゆる思想上，精神上の怒りまでも，すべてモービー・ディックからくるものとしてしまった。

のである。してみれば，エイハブは，懐疑の牙にいやしがたいほどの打撃を受けた，メルヴィルの〈怒り狂える精神〉の象徴と見なければならない。それからまた，第118章において，エイハブが，四分儀を科学の代表とみなして，

お前は，その無能の身をもって太陽を侮辱している！　科学！　呪われてあれ，無益の玩具よ。

とののしり，

もうわしは，お前の力に，わしのこの世の道を導かせぬぞ。

と宣言しているのは，はたして航海技術上の意味のみを含むものであろうか。われわれには，これは，あと10年たらずのうちにダーウィンの「進化論」（1859）を迎えることになっている世界において，科学的知識の前に迷いを生じたメルヴィルの魂の反抗の叫びと思われるのである。第135章では，エイハブは，

スターバックよ，三たび，わしの魂の船は航海に出でたつぞ。

と告げている。第70章でも，エイハブが，

おお，大自然と人間の霊魂よ！　お前たち二つはどこまで相関連し類似していることか，とても言葉では言い現わせぬほどだ。

といっているところから見ても，大自然におけるエイハブとモービー・ディックとの闘いは，とりもなおさず，人間の〈魂の葛藤〉を表わしていることと理解されるのである。

モービー・ディックが，あくまでも悪魔的なものの象徴であることは，第113章において，モービー・ディックを倒すために作られたモリを，かじ屋のパースが「これは白鯨用ではないですか？」とたずねたのに対し，エイハブが，「白魔用だ！」と訂正しているところからも裏づけられよう。それからまた，そのモリに焼きを入れる前に，エイハブが，「主の名においてにあらず，悪魔の名において，なんじに洗礼す！」とラテン語で絶叫したのは，何もエイハブが悪魔と通じているからなのではなくて，そのモリが，悪魔的なモービー・ディックを打ち倒すにふさわしいものである，ということを意味するのだと思われるのである。そのモリを使うエイハブたちに攻撃されたモービー・ディックは，第135章において，

昨日あらたに突き刺さって腐蝕しつつある鉄に狂いたち，あらゆる天から堕ちた天使の群に取りつかれてしまっているかのようであった。

と描かれている。ここにおいて，　われわれは，　信ずる者を懐疑へといざなう悪魔サタンも，もとはと言えば，天使であって，かれもまた天から堕落したものであることを想起すべきなのだ。

第41章には，

かれらの蒙昧の心理の中に，いかなる不思議な経路によって，しかも確乎として，モービー・ディックこそ，人生の大海を遊弋する大悪魔だという料簡がうえつけられるにいたったのか——すべてこうしたことの説明の鍵は，このわたしイシュミールをもってしてもおよびがたい深いところにあるのだ。

とあって，ピークォド号の乗組員たちもみな，海を〈人生〉，モービー・ディックを〈悪魔〉と看做していることがわかる。そして，なぜそのように思いこむにいたったのか，その説明の鍵はナゾだといっているイシュミールも，実は，すでに第1章において，こう述べているのである。

泉に映る悩ましく優しい影をつかむことができぬために，そこに飛びこんで溺れたというナルシサスの物語には，もっと深い意味がある。その同じ影をこそ，われわれはあらゆる河と海とに見るのだ。

従って，海におきることは人生におきることであり，人間の内面におきることである，ということができるのである。

その人生の大海，ないしは人間の内面に遊弋する悪魔たる巨鯨の頭部には，大きな輪状のシワのあるのが認められた，ということが第133章に出ている。そして，エイハブのボートが，モービー・ディックの頭部と直面した時に，この鯨は

一瞬のうちにヒラリと体をかわして，シワだらけのその頭を舟底にピタリとそわせて突き入れて

きた，と描写されている。われわれは，この，モービー・ディックのシワと，エイハブ自身の額のシワとは，相呼応しているものと見たいと思う。第113章で，エイハブは，かじ屋のパースに向かって，片手で自分のシワだらけの額をなでながら，

こら見ろ——かじ屋よ——これを。お前はこういう割れ目をスベスベさせることができるか。かじ屋よ，もしお前にそれができるならば，わしは大喜びで，この頭をお前のカナ床に置いて，お前の一番重いハンマーを，眉間に受けてやろうぞ。どうだ，言うてみよ，こ

の割れ目は直せるものか。

と迫っている。モービー・ディックによってエイハブが片脚を喰いちぎられたことを，メルヴィルの魂が懐疑の牙にグサリと突き刺されたことの象徴と見ることができるとすれば，この額のシワももた，懐疑に悩めるメルヴィルの魂の，苦渋に満てるヒダの表われと思われるのである。それが，単なる表面的なシワではなく，内面にまで深く刻みこまれたものであることは，エイハブが，さらにパースに向かって，

お前の眼には，わしの肉のシワしか見えなかろうが，これはわしの頭蓋骨にまで刻みこまれていて——それは，まったくシワだらけなのだ！

といっているところからも明らかであろう。

第32章には，鯨は，人間の奥深いところで魂をむしばむ思想，として表わされている。

あちこちの空高いところを，雪白の翼を持つ無垢の小鳥が舞っていた。それは女らしい空の優美な想念であった。だが，海のあちこちの底知れぬ藍碧の奥深いところには，雄渾な鯨やカジキトウシやサメが突進していた。それは男らしい海の，勁く錯雑した殺戮的な思想であった。

ほかならぬ，この思想を——この鯨を——倒さむものと，エイハブは追い求めていたのである。

第117章で，「わしはモービー・ディックを倒して，しかも生き残るのだ」と宣言したエイハブも，第118章になると，太陽に向かって，

お前，海の標識よ，空高いところにある強大な水先案内よ，なるほど，お前は，わしがどこにいるかは教えてくれる。だが，わしがどこへ行こうとしているか，かすかな暗示でも与えることができるのか。

と嘆じて，おのれの行く末の不明なることを告白している。しかし，その行くてに希望の灯台はないことを，すでに第52章において，イシュミールが予言しているのである。

夢に見るはるかな神秘を追い，あるいは，いつとなく，時としてあらゆる人間の胸をかすめて遊弋するところの，あの魔性の怪物を，苦難の只中に追い求めつつ，たとえこの地球をめぐろうとも，これらのものがわれわれを導くところは，荒寥たる迷路の中か，さもなくば，その中途での水没かである。

これは，懐疑の導くところ，救いのない迷路か，身の破滅である，ということを意味しているものと思われるのである。

III

以上述べてきたことを根拠の一部として，われわれはここに，つぎのような仮説をあえて提出しようと思う。

すなわち，『白鯨』におけるモービー・ディックは，旧思想の懐疑や否定や破壊につらなる，新しく抬頭しつつあった知識——旧思想から見れば〈邪悪な〉知識——これを具体的に換言すれば，メルヴィルを神の懐疑におとしいれ，ややもすれば神の否定にまで向かわせようとした，現代の自己中心的な思想の象徴——簡略にいうならば，〈懐疑〉の象徴である。また，エイハブは，この〈悪魔的な力〉に対抗しようとした，メルヴィルの〈魂〉の象徴である。従って，エイハブがモービー・ディックに敗れるという『白鯨』という作品は，メルヴィルが懐疑との闘いに敗北したということの，秘かなる〈告白録〉と看做すべきものである。

『白鯨』は，第23章に示されているように，

魂がおのれの広漠たる海原の独立を守ろうとする大坦不敵な努力をしつつ，天地間のあらゆる狂暴な風がその魂を虚偽と卑屈の岸辺に叩きつけようとするに抗する

物語であり，

たとえ，風下の岸が安全の地であろうとも，そこにぶつけられる不名誉を負うよりは，この荒れ狂う広茫の海に滅びようではないか。

という気概を示した作品である。レオン・ハワードの表現に従えば，それは〈人間が自分の内側で敗北する物語〉なのだ。メルヴィルは，白鯨を著

すことによって，自分が神への懐疑の力に決定的に敗れてしまったということを，ひそかに告白したのだと思われる。そのような告白録だからこそ，この作品は，伝統的な通念から見れば，〈よこしまな書物〉なのであった。しかし，胸のうちをすっかり吐露したがゆえに，メルヴィルは〈羊のように潔白〉な気持だといえたのであろう。

さればといって，われわれは，メルヴィルが神を完全に否定し去った，と考えるものではない。1858年，メルヴィルは第2回ヨーロッパ旅行に発ち，リヴァプールで，尊敬する作家ホーソーン——『白鯨』はホーソーンに捧げられている——に会っているが，このときの印象をホーソーンは，

> かれ［メルヴィル］は信ずることができない。だが，かれはまた，不信の中に安住することもできないのだ。

と書いている。ところが，このことは，すでに『白鯨』の中に吐露されているところなのである。第85章に，こう出ている。

> 万人は懐疑し，多数の者は否定する。だが懐疑にもあれ，否定にもあれ，それと共に直観を有するものは，まれである。地上的なあらゆるものへの懐疑，天上的な何ものかに対する直観，この二者をあわせもつなら，その人は信仰者にも不信者にもならず，そのいずれをも同等視する人間となるのだ。

信ずることも，否定し去ることもできなかったメルヴィルは，その旅行で聖地エルサレムを訪れた。この聖地旅行によって，メルヴィルは自己の信仰にテコ入れを行なおうと思っていたにちがいない。だが，現代のエルサレムは，もはや昔日の栄光の都ではなく，メルヴィルに幻滅の思いを抱かせる堕落の都であった。にもかかわらず，メルヴィルにとって，この旅行がいかに重大な意味をもっていたかは，実に20年の歳月を経て，この旅行での経験をもとにした総計 17,122 行におよぶ長大なる詩『クラレル』(1876) を発表したことからも，うかがわれるのである。この詩の主人公たるアメリカ青年クラレルは，信仰を再確認するために聖地を訪れるのだが，かれは結局，いかなる決定的な救いにも到ることができない。われわ

れは，ここにもまた，メルヴィルの魂の遍歴の軌跡を見ることができるのだ。『クラレル』は，はるか『白鯨』の延長線上に位置づけて見るのが正しい。いずれ，この見地から，『白鯨』と『クラレル』とを結ぶ線を軸にした，新しい「メルヴィル伝」が書かれなければならないだろう。

参考書目

1. Arvin, N. *Herman Melville: A Critical Biography.* The Viking Press, 1957 [1950].
2. Bell, Millicent. "Pierre Bayle and *Moby Dick,*" *PMLA,* 66 (Sept., 1951), 626–36.
3. Betts, W. W., Jr. "*Moby-Dick* : Melville's *Faust,*" *LHB,* 1 (1959), 31–44.
4. Brashers, H. C. "Ishmael's Tattoos," *SR,* 70 (Winter, 1962), 137–54.
5. Braswell, W. *Melville's Religious Thought.* The Duke Univ. Press, 1943.
6. Brodtkorb, P., Jr. *Ishmael's White World: A Phenomenological Reading of Moby Dick.* Yale Univ. Press, 1965.
7. Cambon, G. "Ishmael and the Problem of Formal Discontinuities in *Moby-Dick,*" *MLN,* 76 (June, 1961), 516–23.
8. Chase, R. "Melville and *Moby-Dick,*" *The American Novel and Its Tradition.* Doubleday, 1957.
9. Clubb, M. D. "The Second Personal Pronoun in *Moby-Dick.*" *AS,* 35 (Dec., 1960), 252–60.
10. Cook, C. H., Jr, "Ahab's 'Intolerable Allegory,'" *BUSE,* 1 (Spring-Summer, 1955), 45–52.
11. Creeger, G. R. "The Symbolism of Whiteness in Melville's Prose Fiction," *JA,* 5 (1960), 147–63.
12. Dale, T. R. "Melville and Aristotle : The Conclusion of *Moby-Dick* as a Classical Tragedy," *BUSE,* 3 (Spring, 1957), 45–50.
13. Davis, M. R. and W. H. Gilman, eds. *The Letters of Herman Melville.* Yale Univ. Press, 1960.
14. Farnsworth, R. M. "Ishmael to the Royal Masthead," *UKCR,* 28 (March, 1962), 183–90.
15. Foster, C. H. "Something in Emblems: A Reinterpretation of *Moby-Dick,*" *NEQ,* 34 (March, 1961), 3–35.
16. Franklin, H. B. *The Wake of the Gods.* Stanford Univ. Press, 1963.
17. Gibson, W. M. "Introduction" to *Moby Dick,* New York, 1959.
18. Gleim, W. S. *The Meaning of Moby Dick.* Russell and Russell, 1962[1938].
19. Hall, J. B. "*Moby-Dick* : Parable of a Dying System," *WR,* 14 (Spring, 1950), 223–26.
20. Harada, K. (原田敬一) "Melville and Puritanism," *SEL* [Tokyo], 32 (Oct.,

1955), 1-20.

21. Helmcke, H. *Die Funktion des Ich-Erzählers in Herman Melvilles Roman "Moby-Dick."* Mainzer Amerikanistische Beiträge. München, 1957.

22. Hillway, T. *Herman Melville.* Twayne, 1963.

23. Hillway, T. and L. S. Mansfield, eds. *Moby-Dick Centennial Essays.* Southern Methodist Univ. Press, 1953.

24. Hollit, S. "*Moby-Dick* : A Religious Interpretation," *Catholic World,* 163 (May, 1946), 158-62.

25. Holman, C. H. "The Reconciliation of Ishmael : *Moby-Dick* and the Book of Job," *SAQ,* 57 (Autumn, 1958), 477-90.

26. Howard, L. *Herman Melville: A Biography.* Univ. of California Press, 1951.

27. ————. "Herman Melville's *Moby Dick,*" *The American Novel.* The Voice of America Forum Lectures, 18-24. (綷川羔訳「ハーマン・メルヴィル『モービー・ディック』」,『アメリカ小説論』, 北星堂, 昭和40年, 33-43.)

28. Hull, W. "*Moby-Dick* : An Interpretation," *Etc,* 5 (Autumn, 1947), 8-21.

29. Jaffé, D. "The Captain Who Sat for the Portrait of Ahab," *BUSE* (Spring, 1960), 1-22.

30. Jeffrey, L. N. "A Concordance to the Biblical Allusions in *Moby-Dick,*" *BB,* 21 (May-Aug., 1956), 223-29.

31. Kasegawa, K. (綷川羔) "*Moby Dick* as a Symbolic Myth," *SEL* [Tokyo], 36 (April, 1960), 251-72.

32. Kirsch, J. "The Enigma of Moby Dick," *Jour. of Analytical Psych.* [London], 3 (1958), 131-48.

33. Lanzinger, K. "Melvilles Beschreibung des Meeres in *Mardi* im Hinblick auf *Moby-Dick,*" *NS,* 9 (Jan., 1960), 1-15.

34. Lawrence, D. H. "Herman Melville's *Moby Dick,*" *Studies in Classic Amrican Literature.* The Viking Press, 1964 [1923].

35. Leyda, J. *The Melville Log : A Documentary Life of Herman Melville, 1819-1891,* 2 vols. Harcourt, Brace, 1951.

36. Melville, H. *Moby-Dick.* Eds. L. S. Mansfield & H. P. Vincent. Hendricks House, 1952. (阿部知二訳「白鯨」,『メルヴィル』, 世界文学大系32, 筑摩書房, 昭和35年, 3-354.)

37. Millhauser, M. "The Form of *Moby-Dick,*" *JAAC,* 13 (June, 1955), 527-32.

38. Myers, H. A. "Captain Ahab's Discovery : The Tragic Meaning of *Moby-Dick,*" *NEQ,* 15 (1942), 15-34.

39. Olson, C. *Call Me Ishmael.* New York, 1947.

40. Osbourn, R. V. "The White Whale and the Absolute," *EIC,* 6 (April, 1956), 160-70.

41. Parke, J. "Seven *Moby-Dicks.*" *NEQ,* 28 (1955), 319-38.

42. Parker, H., ed. *The Recognition of Herman Melville.* The Univ. of Michigan Press, 1967.

43. Pagnini, M. "Struttura ideologica e struttura stilistica in *Moby-Dick,*" *SA,* 6 (1960), 87-134.

44. Percival, M. O. *A Reading of Moby-Dick*. Chicago, 1950.

45. Pirano, F. "Moby Dick di Herman Melville," *Convivicum*, 15 (1943), 209-43.

46. Schless, H. H. "*Moby Dick* and Dante : A Critique and Time Scheme," *BNYPL*, 65 (May, 1961), 289-312.

47. Scott, S. W. D. "Some Implications of the Typhoon Scene in *MobyDick*," *AL*, 12 (1940), 91-98.

48. Sedgwick, W. E. *Herman Melville: The Tragedy of Mind*. Harvard Univ. Press, 1944.

49. Seelye, J. D. "The Golden Navel : The Cabalism of Ahab's Doubloon," *NCF*, 14 (March, 1960), 350-55.

50. Short, R. W. "Melville as Symbolist," *UKCR*, 15(1948), 38-46.

51. Slochower, H. "Freudian Motifs in *Moby-Dick*," *Complex*, 3 (Fall, 1950), 16-25.

52. Stanzel, F. "Der Ich-Roman : *Moby-Dick*," *WBEP*, 63 (1955), 60-92.

53. Stavrou, C. N. "Ahab and Dick Again," *TSLL*, 3 (Autumn, 1961), 309-20.

54. Stewart, G. R. "The Two Moby-Dicks," *AL*, 25 (Jan., 1954), 417-48.

55. Stoll, E. E. "Symbolism in *Moby-Dick*," *JHI*, 12 (June, 1951), 440-65.

56. Thompson, L. *Melville's Quarrel with God*. Princeton Univ. Press, 1952.

57. Tomita, A. (富田彬) "How to Read *Moby Dick*," *RRAL* [Tokyo], 16 (1955), 1-16, 53-55.

58. Vincent, H. *The Trying-Out of Moby-Dick*. Southern Illinois Univ. Press, 1965 [1949].

59. Vogel, D. "The Dramatic Chapters in *Moby Dick*," *NCF*, 13 (Dec., 1958), 239-47.

60. Wagner, V. "Billy Budd as Moby Dick : An Alternate Reading," *Studies in Honor of John Wilcox*. Detroit, 1958.

61. Walcutt, C. C. "The Fire Symbolism in *Moby-Dick*," *MLN*, 59 (1944), 304-10.

62. Ward, J. A. "The Function of the Cetological Chapters in *Moby-Dick*," *AL*, 28 (May, 1956), 164-83.

63. Watters, R. E. "The Meaning of the White Whale," *UTQ*, 19 (Jan., 1940), 170-82.

64. Weathers, W. T. "*Moby Dick* and the Nineteenth-Century Scene," *TSLL*, 1 (Winter, 1960), 477-501.

65. Weaver, R. M. *Herman Melville, Mariner and Mystic*. Pageant Books, 1961 [1921].

66. Weeks, D. "Two Uses of Moby-Dick," *AQ*, 2 (Summer, 1950), 165-76.

67. Wheeler, O. "Humor in *Moby-Dick* : Two Problems," *AL*, 29 (May, 1957), 203-6.

68. Willson, L. "Yet Another Note on *Moby-Dick*," *DR*, 35 (Spring, 1955), 5-15.

69. Wright, N. "Moby Dick: Jonah's or Job's Whale?" *AL*, 37 (May, 1965), 190-95.

70. Yamaya, S. (山屋三郎) "A New Interpretation of Melville's Moby-Dick," *SEL* [Tokyo], English Number (1961), 59-81.

Note: Abbreviations of periodical titles are the standard abbreviations used in *American Literature* or *PMLA*.

Summary

Yamamoto, Shoh. "Another Reading of *Moby-Dick*," *Geibun Kenkyu* [Keio University, Tokyo], 25 (1968), 185-199.

A hypothesis the writer hereby ventures is this: Moby Dick (the whale) is a symbol of the emerging "evil" knowledge which has much to do with doubt, denial and destruction of old ideas, and, to put it concretely, it represents the modern egotistical thought which forced Melville to be skeptical of God and even to be inclined to deny God; Ahab (the mad man) is an incarnation of Melville' s furious mind defying the demonic force; and, therefore, *Moby-Dick* (the work) is a hidden confession of Melville's tragic failure in the fighting against Doubt.